

---

# 宗教改革期の印刷ビラにみる説得的効果

芹澤 円

## 1. はじめに

現在、私たちの生活はさまざまな情報で溢れている。一度に不特定多数に向けて情報を発信するマスメディアとしては、新聞やラジオのほか、テレビやインターネットがある。「大量生産された媒体を用いて大量の情報を大衆に伝達する行為」(佐藤 1998:4)が始まったのは、宗教改革の時代である。このときのメディアは、紙媒体の「印刷ビラ」(Flugblatt)および「小冊子」(Flugschrift)であり、<sup>1)</sup>このメディアを使って、宗教改革の理念が不特定多数の民衆に向けて発信された。当時の印刷ビラと小冊子は宗教色が強く出ていたものの、「今日の新聞の祖型ともいべき報道文学のたぐい」(エンゲルジング 1985:204)として、現在の新聞のような役割も果たしていた。人々はより新しい情報を求めて、印刷ビラと小冊子の読み聞かせに参加した。

本稿で分析対象とするのは、印刷ビラである。印刷ビラは通常、小冊子とは異なり、木版画による図像が大きな部分を占め、その下に言語による説明文が付されていた。特に、文字を持たない民衆にとって、図像が付いた印刷ビラは重要な情報源となる。民衆の確信をさらに強化し、民衆の心を宗教改革に向かわせるために、宗教改革者たちは印刷ビラの中に、図像と言語の両面においてさまざまな工夫を凝らして、情報が可能な限り効果的に民衆に伝わるように努めた。その際に重要なのは、レトリック(修辞法)であった。古代の理論家が「良き弁論の芸術(わざ)」(プレット 2000:17)と呼んだレトリックは、「弁論に関する方法」(同上:16)であり、「納得させ、確信させる技術」(同上:17)である。<sup>2)</sup>本稿

---

1) 「印刷ビラ」と「小冊子」の基本的な違いは、1枚からなるか複数枚からなるかである。詳しくは、2.2.を参照。

2) 説得の作用については、プレット(2000:18-21)を参照。

では、宗教改革期に配布された印刷ビラ 2 点を例にして、言語テキストだけではなく、図像にも用いられたレトリックの分析を行い、印刷ビラの情報がどのような説得的効果をめざして発信されたのかを考察するものである。

## 2. 印刷術と印刷ビラ

### 2.1 印刷技術

1440 年頃に、マインツで都市貴族の家系であるヨハネス・グーテンベルク (Johannes Gutenberg) によって、活版印刷術が発明された。この発明以前に、書籍を作成するために欠かせなかったのは写字であり、文字はひとつひとつ丁寧に、人の手で書き写されていた。例えば、12 世紀から 13 世紀にヨーロッパの各地で誕生した大学では、多くの筆耕による分担書写が行われていた。<sup>3)</sup> 修道院や大学での書写に加え、当時の学生は、大学近辺にいる書写生に、料金を支払って筆写を頼んだりもしていた。<sup>4)</sup> しかしながらこのような作業では、一冊の本を作るのに膨大な時間がかかると同時に、人の手によるものであるため、写し間違いが起きたことは言うまでもない。活版印刷術の発展は、こうした書籍を作成する手順を、より速くより簡単にした。1520 年までには、印刷所は神聖ローマ帝国とスイスにおいて、都市を中心とし、62 カ所を数えるまでに成長した。<sup>5)</sup>

しかし、書籍の概念は活版印刷術が発達してきたとはいえ、現在とはずいぶんと異なっていた。というのも、本は高価で貴重な扱いを受けていたからだ。つまり、本は一般的に出回るものではなかったのと同時に、本を所有していることが上流階級であるというステータスとなっていたことがうかがえる。森田はこのことに関して、「書籍は権威、身分のシンボルであり、読書はエリートの行為」(森田 1993 : 23) であると述べている。

活版印刷術とともに、印刷物の生産向上のためになくではならなかったものは、紙の生産である。それまでの書籍に使用されていたのは羊皮紙と呼ばれる、動物の皮から作られたものだった。文字を皮の表面に書けるようにするためには、何度も繰り返し皮をなめす必要があり、こちらも非常に時間のかかる作業であった。

---

3) 森田 (1993 : 23) を参照。

4) フェーブル、マルタン (1985 : 上巻 51-56) を参照。

5) 田辺、佐藤 (1995 : 100) を参照。

また、一枚が厚いため、何百ページにも及ぶ本は、それだけでかなりの厚みと重さを要し、持ち運びも困難だった。さらに、200 ページの本を作るために、25 頭もの羊が必要であったという例もある。<sup>6)</sup> したがって、「羊皮紙は、大量消費に適していたパピルスが消滅して以来、一般に使用される筆記材料となっていたが、生産量や価格の面からみて、文字文化、読書文化の発展を支える力ではなかった」（エンゲルジング 1985 : 26）。

このような状況の中で、紙の生産性が向上したことは、宗教改革時代に非常に大きな影響をもたらした。エンゲルジングは紙の値段についても考察しており、

フランクフルト・アム・マインでは未使用の白紙の値段が、1376 年から 1483 年までに 15% 下落し、1438 年から 1470 年までに 30%、1470 年から 1513 年までには実に 40% も低下したと推定されている。とはいえ、この地で使用されていた紙は、まだイタリア産がほとんどであり、この事情は北ドイツやスカンジナビアについても同じであった。（エンゲルジング 1985 : 26）

と述べている。需要が増加するにつれ、価格も安くなることから、紙の使用量はかなり増えたと考えられるわけである。

## 2.2 印刷ビラと小冊子

印刷技術の向上と紙の生産量の増加により、書籍の製造をより速く、そして安く行うことができるようになった。これら双方の利点に着目したのが、宗教改革者たちである。彼らは「それ自体で独立完結しており、継続発行されたり、本の形に綴じられたりしていない」（須澤、井出 2009 : 159）形状の印刷ビラと小冊子に、宗教改革の思想や意図を表し、大量に流布させることで民衆に宗教改革の意義を示そうとした。小冊子の類いは、1518 年から 1523 年の間に 3000 点を越えたという。<sup>7)</sup>

印刷ビラは基本的に一枚刷りだが、図像が主体となっているため、ある程度の

6) 永田（2004 : 35）を参照。

7) 田辺、佐藤（1995 : 100）を参照。

大きさが必要となってくる。<sup>8)</sup> それに対して、小冊子は複数枚からなるが、小型で軽くて持ち運びやすく作られていた。<sup>9)</sup> 「行商する書籍商が宿屋でも街角でも簡単に売ることができたとし、いざ官憲の手入れなどの時にはただちにそれを隠す」（田辺、佐藤 1995 : 100）ためである。一方で印刷ビラはサイズが大きくても一枚刷りであったために、簡単に小さく折りたたむことが可能だ。たたんで小さくしてしまえば、見つかりにくい。このため、印刷ビラは確実に民衆の間に広まっていた。

このように、印刷ビラと小冊子は形態が異なるものの、宗教改革者の理念を広めるという点において同等の意味を持っていた。1450 年から 1550 年の時期における小冊子について Schwitalla (1983) が行った次の特徴づけは、小冊子にも印刷ビラにも当てはまるものであるとみなすことができる。

- a) はじめから綴じられておらず、表紙が付けられていなかった。
- b) より大きいテキストの一部として出版されずに、独立したテキストとして出版された。
- c) それがある特定の読者層に向けて書かれたとしても、根本的には、ことばの読み書きができる人なら誰でもそれを読み、そして聞いてよい、という意図とともに配布された。
- d) それが受け手に対して特定の意向と見解を伝えようと意図しているものであるため、公益のための議論をめぐる時局にかなった問題が扱われており、公益のために、社会の重要な問題を解決することに貢献しようとした。
- e) これらの社会問題に関する読者や聴衆の立場を固定しようとした、もしくは変えようとした。そして場合によっては具体的に行動するように、もしくは行動をやめるように要求した。(Schwitalla 1983 : 14)

---

8) 例えば、田辺、佐藤（1995）に収められている印刷ビラ 75 点は、「カタログ解説」（田辺、佐藤 1995 : 116-141）の記載によれば、おおよそ縦 30 センチから 40 センチ、横 20 センチから 30 センチ程のものである。

9) 田辺、佐藤（1995 : 100）を参照。

### 3. 文字と声

#### 3.1 民衆と文字

ドイツでは、16世紀に入っても、未だに書籍に使用されていた言語の大部分はラテン語であった。なぜなら、人文主義の時代において、ラテン語はさまざまな学問における言語であり、ローマの伝統を基盤とした法律制度における言語であったからである。<sup>10)</sup>

ドイツで印刷された書籍全体のラテン語書籍とドイツ語書籍との割合は、1500年には、ドイツ語によるものが約80点で全体の5%未満で、残りの95%強はラテン語で印刷、1518年においても、ドイツ語によるものは約150点で全体の10%にすぎない。(須澤、井出 2009: 157)

しかしながら、一般の民衆が話す言語は、当然ながらドイツ語であった。この時代は、修道院や学校などで習わなければ、ラテン語はもちろんのこと、ドイツ語でさえ読み書きをすることは難しかった。さらに、当時は読み書きができるかどうかで、社会的に階層が区別されていた時代でもあった。<sup>11)</sup> 当時の識字率は、都市部においてもおよそ10%から30%ほどで、全体としては、おそらく5%を超えることはないという。<sup>12)</sup> このように、ほとんどの民衆がまだまだ文字とは無縁であり、また第2章で述べたように、書籍が安くなっていったとしても、一般の民衆には書籍を買う余裕は、ほとんどなかった。<sup>13)</sup>

文字を持たない、声に依存していた当時の民衆の生活を、オングは、「一次的な声の文化 primary oral culture (つまり、まったく書くことを知らない文化)」(オング 1991: 5)と呼んでいる。つまり、当時のほとんどの人々は、発せられた言語をとどめておく術を持っていなかったことになる。

#### 3.2 読み聞かせの機能

それでは、どのように識字率の低い民衆に印刷ビラや小冊子が広まったのだろ

10) ポーレンツ (1974: 103) を参照。

11) Scribner (1981: 2) を参照。

12) 同上、同ページを参照。

13) 森田 (1993: 33) を参照。

うか。それは、「読み聞かせ」によるものであった。

15 世紀における大衆の読書には、主として三つのやり方、すなわち、自分の目で読むこと、他人の朗読を聴くこと、それに書物を眺めることという三様の方法があった。最初のやり方はまったく当たり前であり、二番目も同じことである。しかし、ここで当時の事情を委しく説明するために注釈しておかねばならないが、15 世紀に出た大衆向けの書物には、目で読むことも、耳で聴くことも、書物の内容を取り入れるやり方としてはまったく同等であると説くものが多かったのである。(エンゲルジング 1985 : 49)

つまり 15 世紀から確立されていた読書の形態が、16 世紀になってからも使用され、印刷ビラと小冊子に対しても取り入れられたのである。

確かにオングが言うように、「声の文化」は「人間どうしのやりとり」にずっと大きく依存している」(オング 1991 : 145)。なぜなら、当時の人と人とのコミュニケーションは、言語を介しており、また、その言語のコミュニケーションは、さらなる「人々を結びつけて集団にする」(オング 1991 : 147) 力を持っているからだ。しかしこれとは逆に、読むことは他人を必要としない単独の行為である。読書についてオングはさらに、話すことは人々を一体にするが、読むことは聴衆の一体性をくずすと述べている。<sup>14)</sup> そうであるならば、大衆に印刷ビラや小冊子を声(音声)を用いて「読み聴かせる」ことで、聴衆の一体感が生みだされ、一度に宗教改革者の意図を伝えることができることになる。この意味において、声による読み聞かせを必要とした民衆の識字率の低さが、聴衆の一体感の形成を促進し、宗教改革に有利に働いたと言えよう。読み聞かせするという行為は、おおよそ「声の文化」だけでも「文字の文化」だけでも属することのない、いわばこの二つの文化の、ちょうど間に位置する存在ということになる。

印刷ビラと小冊子の読み聞かせは、都市を中心として行われていた。例えば、ウルム(Ulm)では市参事会から「街角集会」(Winkelversammlung)などというレッテルをはられ、苦情が申し立てられるほど、盛んに集団の読み聞かせが行わ

---

14) オング(1991 : 157)を参照。

れていた。<sup>15)</sup> また、読み聞かせだけでなく、民衆同士による、宗教に関する語り合いも存在していた。それは、宗教という少し重く真剣なテーマでありながら、飲み屋や飲食店において語り合われていた。<sup>16)</sup> それまで宗教的な話や説教、そして聖書の内容などは専ら、教会に行き、そこで聖職者から一方的に話してもらうという方法が一般的だった。ところが、印刷ビラが広まってから、民衆同士の活発な宗教に対する話し合いが普及したのである。

印刷ビラを読み聞かせるに際して、木版画や銅版画による挿し絵が果たした役割はきわめて重要である。挿し絵として印刷ビラに使用された木版画は、多くの場合、「本文の内容を端的に示す [...] 表紙や挿し絵」(田辺、佐藤 1995 : 100)であった。これはつまり、文字が読めずとも、単に木版画を見ることによって、民衆がビラの内容を把握していた、ということになる。また、印刷ビラにおいては、「どちらかといえば木版画が主体となっている場合が多」(森田 1993 : 35)く、聴衆に印刷ビラを読み聞かせる際には、「まさに紙芝居のように、木版画をみせながら伝達すべき内容を解説した」(同上、同ページ)と考えられている。このように、口頭でのコミュニケーションと、視覚を利用したコミュニケーションの両方を用いることで、聞き手によりわかりやすく、印刷ビラの内容を伝えようとしたのである。

次に、印刷ビラの分析を具体的に行っていくことにする。

## 4. 印刷ビラ『ヨハン・フス』の分析

### 4.1 基本情報とテキスト

この章で分析対象とする印刷ビラの基本情報とテキストは、次の通りである。

- a. タイトル : Johann Hus / ヨハン・フス
- b. 作 者 : 不 詳
- c. 年 代 : 1546 年頃<sup>17)</sup>
- d. 翻 訳 : 田辺幹之助による翻訳を元に、筆者が検討を加えて再度翻訳し直した。

15) Scribner (1981 : 68) を参照。

16) 同上、同ページを参照。

17) 1546 年はルターが没した年である。

< 図像 >

資料 1



出典：田辺幹之助、佐藤直樹（編）（1995）『ゴータ市美術館所蔵作品によ  
 る宗教改革時代のドイツ木版画』国立西洋美術館。



## &lt;言語テキスト&gt;

(ドイツ語の言語テキストは筆者が文字に起こした。オリジナルの右端が一部切れているため、文字が判別できない箇所については、筆者が前後関係等からドイツ語の再構成を試み、[]を使用して記した。)

	Johann Huss	ヨハン・フス
	Als man thet schreiben Tause[nd Jar]	主キリストの誕生後
	Vierhundert funfftzehn furwar	まことに 1415 年が
	Nach der geburt des Herrn Chr[isti]	記された時
	Wart zu Costnitz auffm Concili	コンスタンツにおける会議にて
5	Verbrennet / der viel heilig man	至聖の人ヨハン・フスが焚刑にあった
	Johan Hus das er nicht nam an	彼は悪魔に由来する
	Die abgottisch kirch zu Rom	偶像崇拝のローマ教会を
	Welche vom Teuffel vrsprung no[m]	受け入れなかった
	Er sprach ich gleub allzeit allein	彼は言った
10	Ein Christlich kirch in gemein	常に普遍的なキリスト教会のみを信じ
	Welche allein in Christum gleubt	る
	In welcher Christus ist das heu[bt]	その教会はキリストのみを信じ
	Vnd nicht der Babst der Antechri[st]	キリストが長であり
	Darumb er wart zur selben frist	反キリストである教皇が長ではない
15	Vons Sathans Sinagog verbr[ant]	それ故に彼はその時に
	War versammelt aus allem landt	サタンのシナゴグによって焼かれた
	Dieser Johannes Hus gantz fre[y]	あらゆる国から集まった人々に向かっ
	Sagt an seim end ein Prophecey	て
	Sprach itzt ein Gans ihr braten	このヨハン・フスは堂々と
20	Vber hundert jar das halt in hut[不明]	自身の終わりにあたって預言を述べて
	So wert kommen ein weisser sch[wan]	こう言った 今、あなた方は一羽の鷺鳥
	Den wert ihr vngebraten lan	を焼くが
	Wert lieblich singen inn die welt	100 年間その鷺鳥は守られる
	Martinus Lutherus wart geme[lt]	すると 1 羽の白い白鳥がやって来るで
25	Welchen im Geist der heilig man	あろう
	Gesehen hat gantz lobesan	あなた方はその白鳥を焼かせることは
	Das der solt kommen in dem Ge[ist]	しないであらう

	Elie welchs er hat beweist	その白鳥は世界に向けて快く歌うだろ
	Reichlich vber die dreissig jar	う
30	Gottes wort gepredigt lauter kla[r]	こうしてマルティン・ルターが告げ知ら
	Vns allen zu heil vnd fromen	された
	Biss ihn Gott hat hingenomen	聖人は霊の中に誉れ高く見てとった
	Jn stiller rhw ins Himels stath	彼がエリアの霊のうちに来る定めにあ
	Wie Johan Hus weissaget hat	ることを
35	Drumb seind diese Propheten b[ereit]	そしてそのことを彼（ルター）は証明し
	Heilig zu halten alle zeit	た
	Obs schon dem bapst vnd seiner (1 語欠)	30 年以上の間
	Vordreust /so bleibes doch ewig (1 語欠)	神の言葉を偽らず明確に伝え
		我々全てに平安と敬虔をもたらした
40	Zu Magdeburgk bey Jörg S(欠)	神がルターを平穏な安らぎの中で天へ
	ier bey Sanct Peter.	召すまで
		ヨハン・フスが預言したように
		だからこそこれらの預言者たちは
		常に神聖にし続ける覚悟がある
		たとえ教皇とその（1 語欠）には不快で
		あっても
		それはしかし永遠にあり続ける(1 語欠)
		マグデブルクにて、イェルク・S（欠）
		により（欠）ザンクト・ペーター近郊

## 4.2 分析と考察

図像（巻末資料 1）はビラ全体の左 3 分の 2 を占めている。中央には、黒い修道服を着たヨハン・フスが横向き姿勢、全身で描かれている。右手には紙を、左手は大地と平行に出している。彼の両側には一本ずつ木が並び、その両方に天使がとまっているのが見える。図像下には、木の根元にそれぞれ白鳥と、焼かれている鷺鳥がいる。その鷺鳥は首を紐で縛られ、棒につながれている。

第一に目につくのは、修道服である。これは服装による権威付けであると言える。<sup>18)</sup> これによってビラを見る側に、フスの立場を瞬時に理解させると共に、テ

18) チャルディーニ（2007:355）を参照。

クストの内容にも、神の言葉との関連を連想させ、さらなる権威を付属させる。聞き手は、より抵抗無くテキスト内容を聞き入れることにつながり、説得されやすい状態になる。では、フスが持つこの紙は何を意味するだろうか。例えば、1521年や1522年に出されたマルティン・ルターの肖像画ビラをはじめとする、3分の2以上のルター肖像画ビラにおいて、彼は聖書を手にしている。<sup>19)</sup> これは福音主義を根底とするルターにとって、聖書が彼の最大の象徴であったと同時に、ドイツ語聖書を完成させた人物ということからだ。<sup>20)</sup> このように考えていくと、このフスが手にする紙は、活発な執筆活動を象徴しているのではないと思われる。現に哲学者でもあるフスは、1412年にヨハネス23世に対する『反贖宥状論』、1413年には『教会について』など、皇帝や教会に対する批判を書き表している。つまり、フスが単なる聖職者にとどまることなく、自らの生命を危険にさらしながらも、カトリック教会の腐敗を積極的に訴えたという、当時で言えば100年以上も前の事実を、この印刷ビラが配られた時代の民衆に知らしめるために、フスに紙を握らせたと考えることができる。

次に鷺鳥と白鳥、さらに木を見ていく。これらは、言語テキストの内容にあわせて描かれたものだ。「鷺鳥を意味する彼の名前はよくもじって使われて」(田辺、佐藤 1995: 140) いる。これはチェコ語で鷺鳥を *husa* と言うことからきている。1415年のコンスタンツ宗教会議によって、焚刑にあった様子をここでは鷺鳥によって表していることがわかる。また、テキスト内容から鷺鳥が白鳥になって蘇ることが述べられており、双方がフスを表している可能性がある。さて、この二羽の背後に位置している木は、一見すると図像における単なる背景装飾とも見てとれる。しかし、こうも考えられないだろうか。ここでの木は、それぞれの鳥と天をつなぐ一本の梯子のような役割を果たしている。鷺鳥の場合は死後に神に召され、また白鳥の場合は生のある間、神の恩寵を受ける。つまり、フスが神との永遠のつながりがあることを表し、神から認められた存在であることを示している。神とのつながりを表すことは、フスによるカトリック批判の活動が正しいものであったことを主張している。

ではここからは言語テキストを見ていく。まず、読み取れない単語を除いた全

19) Scribner (1981: 17) を参照。

20) この点について、Scribner (1981: 16) はルターを *a man of the Bible* と呼んでいる。

てにおいて、脚韻（Reim）が使用されている。<sup>21)</sup>「読み聞かせ」が行われていた背景を考えると、聞きやすさを得るために韻が踏まれていたことは容易に想像がつく。5行目では、フスを *viel heilig*「至聖の」と装飾することで、まずフスを聖人化し、フス自身に対する権威付けを行っている。さらには、火刑の判決は間違いであったこと、ひいてはカトリック教会そのものが間違いであることを主張し、カトリック教会に対する信頼を聞き手から喪失させようとしている。7行目から8行目では、ローマ・カトリック教会（*Rom*）を悪魔（*Teuffel*）と関連づけている。悪魔は元来、聖書においてキリストの敵とされてきた。そのため、当時の民衆にとって、一番身近な悪を代表しているのが悪魔だ。悪魔は悪の中でも絶対的な位置を占め、慈悲の余地を与えない。そのため、カトリック教会の墮落を絶対に許さない立場を表明すると同時に、「カトリック教会＝悪魔」というイメージを聞き手に植え付けようとしている。

9行目には、*allzeit allein*「常に～のみ」という頭韻（Alliteration）を含む、誇張法（Hyperbel）が使われている。頭韻により、聞き手にはリズム良く聞こえ、さらに聞き手である民衆に対し、「常に普遍的なキリスト教会のみ」と述べることで、後述されている反キリストからの差別化を図っている。この差別化はまた、11行目にもみられる *allein* にも当てはまることである。10行目から13行目にかけて、*Christlich*「キリストの」、*Christum*「キリスト」、*Christus*「キリスト」、*Antechrist*「反キリスト」という語尾変化、もしくは接辞を含んではいるものの、キリストの意味をあらわす単語が反復（Tautologie）されている。ここでは、キリストと「反キリスト」というコントラストをまず明確に示すとともに、団結した「反カトリック」への認識を高めようとしている。

19行目から24行目まで、フスの預言内容が諷諭（Allegorie）を用いながら述べられている。ここで登場するのが、図像にも描かれている鷺鳥と白鳥だ。鷺鳥がフスを表していることは、図像分析の段階で述べたが、ここではさらに深く、この二羽の鳥についてみていく。鷺鳥は、野生の雁を飼育用に変種させたもので

21) 1行目に記した *Jar* は、オリジナルからは（紙の切断のため）読み取ることができないが、同時代の文献である Gölitzsch (1563 : 1) に *Als man thet beschreiben Tausent Jar / fünff hundert Dryyndsechßig zwar* と記されていることから、この言い回しを類推し、*Jar* を補った。脚韻の関係からみても、次の行末の *furwar* と *Jar* はうまく合致する。

ある。雁は神秘的な預言能力を持つ鳥として知られており、<sup>22)</sup> この「預言」としての相似からも、雁（鷺鳥）がフスに当てはめられたことは想像がつく。その預言内容によれば、鷺鳥は焼かれても 100 年後に蘇る。この 100 年という具体的な数字は、フスが火あぶりにされた年から 100 年と考えると、1515 年となり、24 行目にあるように、マルティン・ルターをさしていることがわかる。そうであるならば、蘇った白鳥はルターであることになる。ではその白鳥はなんであろうか。聖書という観点から述べると、白鳥は汚れた生き物の一つとして列挙されているにすぎず、特別な意味は付加されていない。<sup>23)</sup> キリスト教においては、深い意味のない白鳥は、「ケルト人やゲルマン人たちが伝えるローカルな神話・伝承に、ギリシア神話の重い権威」（上村 1990: 121）が混じりあって、今日に至るまでの白鳥というシンボルを形成してきた。輝きをもつ白さや太陽など、象徴するものはさまざまであるが、ここで興味深いのは錬金術との関わりだ。4 段階に分かれている「賢者の石」の工程のうち、それぞれが色と鳥のコードで説明される。その 3 段階目が白鳥による白の過程であり、白く輝く水銀が他の金属と素早く結びつく性質が、白鳥の白い翼と連想されたことによる。この白鳥の段階を経ると、不老不死の石を得ることが出来る。<sup>24)</sup> この不老不死の概念は、最終行にある *ewig*「永遠に」とも関係する。さらに錬金術に関連するのは雁も同じである。ギリシア人やケルト人の信仰では、雁は人類に鉄の作り方を教えたとして、秘伝を授ける鳥とみなされていた。<sup>25)</sup> その上、錬金術はカトリック教会においては、異端と見なされていた。

霊的錬金術師は、賢者の石をキリストと同一視するのみならず、自分自身をもこの両者と同一化していく。ここに異端性が含まれていることは明らかである。ルターは、実際の効用のためにも、またキリスト教の教義を検証するためにも、錬金術を称えた数少ない高位の教会人のひとりである。（エリアーデ 2002: 471）

22) クレベール（1989: 116）を参照。

23) ミルワード（1992: 322）を参照。

24) 錬金術については、村上（1990: 127-128）を参照。

25) この点については、クレベール（1989: 117）を参照。

この点においても、カトリックとルター派の違いを明らかに示す為に錬金術をほのめかしていると考えることができる。

このようにみていくと、鷲鳥と白鳥の諷諭の根底には民間信仰と、錬金術という科学の背景があるように思われる。信仰はそれを信じる者にとっては権威となり、科学的証明も権威を持つものである。この二つの権威をテキスト内で示すことで、聞き手に対してフスの正当性への信頼を絶対的なものにしようとしたのではないかと考えることができる。

30 行目と 32 行目における *Gott*「神」の使用は、キリスト教の中でも最高の権威付けを意味しており、神と共にあるのはフスやルターの側であることを、ここでもう一度聞き手に確認させる効果を持っている。

## 5. 印刷ビラ『ルターの敵対者』の分析

### 5.1 基本情報とテキスト

この章で分析対象とする印刷ビラの基本情報とテキストは、次の通りである。

- a. タイトル：ルターの敵対者
- b. 作 者：不詳
- c. 年 代：1521 年頃
- d. 翻 訳：森田安一

< 図像 >

図像資料 2



出典：森田安一（1993）『ルターの首引き猫』山川出版社。

< 言語テキスト >

（ドイツ語の言語テキストは筆者が文字に起こした。）

図上、左から

- |                                |                         |
|--------------------------------|-------------------------|
| Doctor Murnar. Argentinien.    | ムルナー博士（Argentinien は不明） |
| Doctor bock Emser Lips(e)n:    | 山羊博士ライプツィッヒのエムザー        |
| Leo papa .r. Antichrist:       | 教皇レオ、反キリスト              |
| Doctor Eckius. Ingelstatensis: | インゴールシュタットのエック博士        |
| Doctor Lemp. Tubingenis:       | テュービンゲンのレンプ博士           |

図中央、左から

Lieber Eck nymm also von mir zu gut

Ich weiß noch ein gutten Cardinals hut

Magstu den Luther Concludieren

Will ich dir dein Servkopff mit ziren

愛するエックよ、さあ、わたしからの好意を受けなさい。

さらにわたしは枢機卿の帽子についても心得ている。  
もしあなたがルターを打ち負かすことができれば  
わたしはその豚の頭をそれで飾ってあげよう。

Herr Löw all bübrey vnd faule sachen  
Kan(n) ich durchs gelt widerumb gerecht mache(n)  
Mit meiner Sophistrey vnd grossem geschray  
Haw ich den Luther vnd Gots wort entzrvay  
レオ様、すべての破廉恥な行為といかがわしい問題を  
わたしは金でふたたび正しくしてみせます。  
多くの詭弁と仰々しい叫び声で  
わたしはルターと神の言葉とをずたずたにわってみせます。

図下、左から  
Der Bapst wolt auch ein mauser ban  
Des nam sich Doctor Murnar an.  
M(読み取り不可能) auß hin vnd her vnd widerumb  
Noch ist der Luther gerecht vnd frumm.  
教皇はネズミも一匹破門にしたがっている。  
ムルナーがその仕事をひきうけ  
あちこちあちこち動いたけれど  
ルターはなお正しく、信仰深いのだ。

Ach junckfraw Bock wie stinckst so hart  
Nach keu(n)schart in deinem langen part.  
Ich glaub daß dein Theology  
Sey merers teyls bocksteitzlerey.  
ああ、処女の山羊さんよ、なんでそんなに強烈に臭うのか  
お前の長い髭のなかに貞節の匂いが。  
わたしは思う、お前の神学は



ほとんど山羊のダラダラ話学だ。

Der irdisch Got vnd Antichrist

Hat vil geprauchet bißher der list.

Mit gewalt und geytz falsch Curtisey

Ach Christ von hymel mach vns frey.

地上の神・反キリストは

これまで多くの策略をめぐらしてきた

暴力、吝嗇（りんしょく）、誤った佞臣（ねいしん）を用いて。

ああ、天におられるキリストよ！わたしたちを自由にしてください。

Recht wie ein Saw lebt Doctor Eck

Wan er hat wein vnd eselweck.

Sein Lo(g が抜けたと考えられる)ick thut probieren mer

Dan(n) Bibel gschrift vnd Christus ler.

エック博士はまさに豚のように生きている

かれがワインを飲み、上等パンを食べるときには。

かれの論理は聖書やキリストの教え以上に

多くを論証するという。

Herr Doctor Lemp Euangelist

Mit neyd vnd zorn ein boser Christ.

Er wuet vnd pilt recht wie ein hundt.

Der gschrift hat er gar wenig grunde.

レンプ博士は巡回説教者

妬みと怒り狂う悪しきキリスト者。

かれはまさに犬のように猛り狂い、吠えたてるが、

かれの主張はほとんど聖書に基づいていない。

## 5.2 分 析

図像（巻末資料 2）において、言語テキストは上下段にわかれて書かれており、この印刷ビラのおおよそ 7 分の 4 ほどの割合を、図像が占めている。一番上に書かれているのは、それぞれ描かれている 5 人の人物の名前だ。そしてその 5 人というのがルターの敵対者達だ。しかし頭の様子が少しおかしい。図像左から、頭が猫のトーマス・ムルナー（Thomas Murnar）、山羊のヒエロニムス・エムザー（Hieronymus Emser）、ライオンのレオ 10 世（Leo）、豚のヨハン・エック（Johann Eck）、そして犬のヤーコブ・レンプ（Jakob Lemp）だ。これらの動物は、単に何の理由も無く当てはめられたのではない。まずムルナーの図像から分析する。彼は、その名前がオノマトペとして風刺的にもじられた。つまり、Murnar の *mur* は猫の鳴き声であり、<sup>26)</sup> また *nar* は *Narr* という「愚か者」を意味し、「阿呆猫」と同じ発音になると皮肉られた。<sup>27)</sup> ムルナーは、フランシスコ会の修道士であったため、修道服を着ている。また、これはレオ 10 世を除く他の 3 人にも当てはまることであるが、「博士」を意味するベレー帽を被っている。<sup>28)</sup> さらに、口にはねずみを一匹くわえているのだが、これは言語テキスト内で言及されているように、ルターを表したものだ。そして右手には、書物（聖書とは言いきれない）を手にしている。ムルナーは「桂冠詩人、神学博士、法学博士の肩書きをもつ一方、市井に交わって教育、啓蒙、布教活動」（新井 1984 : 6）を行い、「教育的・啓蒙的用途の為に書かれた専ら散文的な著述類と、時代に共通する性格として教訓的傾向を強く帯びるとはいえ専ら韻文で著された文学的作品、及び宗教的意図が前面に出る論争的文書」（同上、同ページ）という幅広い著作活動を行っていた。またルター同様、非常に高い教育を受け、言語の面、そして文学的においても、かなりの才能を持っていた。<sup>29)</sup> このことを示すために、書物を持たせたと考えられる。

山羊のエムザーは彼の名と、<sup>30)</sup> 彼の紋章に山羊が描かれていたことに由来している。<sup>31)</sup> また、牡山羊はきつい体臭や不潔さ、あからさまな獣性を持ち、<sup>32)</sup> さら

26) Scribner (1981 : 74) を参照。

27) ムルナーの名のもじりについては、森田 (1993 : 230) を参照。

28) Scribner (1981 : 15) を参照。

29) Nitta (2008 : 174) を参照。

30) Scribner (1981 : 74) を参照。

31) 同上、同ページと（森田 (1993 : 155) を参照。

32) クレベール (1989 : 77) を参照。

に中世においては悪そのものに置き換えられ、古典的な悪魔をあらわす図像は山羊の角と足を持っている。<sup>33)</sup> ここからエムザーに対し、悪魔の印象も付随させることができる。エムザーは右手に紙を持っている。これは当時、彼が教父、そしてエラスムスの諸著書の翻訳者として認められていたこと、<sup>34)</sup> そして1520年から27年にかけてルターの個々の著作に対し、多くの反論文書を書いたこと<sup>35)</sup> などの執筆活動を示唆するものとして考えてよいだろう。

次に中央のレオ10世だが、これは *Leo* がラテン語でライオンを意味すること、またその残忍さが、ライオンと同義として考えられた結果だと言える。<sup>36)</sup> 教皇レオ10世は、豪華な生活を思わせるきらびやかな洋服を身にまとっている。また頭には教皇を象徴する三重冠を被り、手には王笏を持っている。このレオ10世は1520年に教勅によってルターに破門警言し、翌1521年にはルターを破門した張本人である。<sup>37)</sup>

エックについては諸説あるようだ。彼の名 *Eck* を様々にもじり、例えば *Keck* として「向こう見ずな」、*Dr. Eck* としてそこから *Dreck* が導き出され、「汚物、ふん、泥」を連想させた。もしくは *Geck* として「うぬぼれ屋、気どり屋」などという揶揄があったそうだが、一番有力なのは *Eck* から *Ecker* という「どんぐり」の単語を結びつけ、どんぐりを食べる動物、つまり「豚」を当てはめたものだ。<sup>38)</sup> 左手にはどんぐりを握っているため、<sup>39)</sup> *Ecker* というもじりがこの印刷ビラにおいて示唆されていることは間違いないだろう。豚は本質的に汚い動物とされ、<sup>40)</sup> それは旧約聖書における汚れた動物として特徴づけられている<sup>41)</sup> ことに関わると考えられる。さらに、どんな餌でも大量に吞み込むという豚の能力<sup>42)</sup> も含めて、豚の汚さと、どんな物でも構わず取り込もうとする貪欲な姿勢を、エックに重ねている。

33) クレバー (1989: 79) を参照。

34) シュトゥッペリヒ (1984: 356) を参照。

35) 『キリスト教人名辞典』(1986: 285) を参照。

36) Scribner (1981: 75) と森田 (1993: 196) を参照。

37) 『キリスト教人名辞典』(1986: 1850) を参照。

38) エックの名のもじりについては、森田 (1993: 158) を参照。

39) Scribner (1981: 75) を参照。

40) クレバー (1989: 130) を参照。

41) ミルワード (1992: 322) を参照。

42) クレバー (1989: 130) を参照。

最後にレンプだが、実際のところなぜ犬が使用されたのかはよくわかっていない。彼に対する名前もじりの揶揄はある。それは *Lemp* を *Lumpen* とし、「ぼろ、がらくた」とした。しかし、犬とはやはり結びつかない。<sup>43)</sup> Scribner (1981) はこの印刷ビラにおいて、レンプは手に持つ骨に関して、喧嘩好きでやかましく口論する、噛みつく野犬として描かれていると述べている。<sup>44)</sup> 確かに神話の世界では、犬は攻撃的な性格を持つ動物として描かれ続けており、<sup>45)</sup> この性格とレンプの性格を同一視していると考えられる。

ここまで見てきてわかったことは、図像全体にあるちぐはぐさである。敵対者の5人にはそれぞれ修道服を着せ、ベレー帽をかぶせ、またレオ10世には豪華な衣装を着せている。さらに、きらびやかさを増す額縁まで描く一方で、5人の頭は動物に置き換えられ、ここでの大きなコントラストが図像の中に滑稽さと皮肉を生んでいる。

では今度は言語テキストに目を向ける。ルターへの敵対者の紹介ではまず、ムルナーとエムザー、そしてエックとレンプが、それぞれ脚韻を踏んでいる。レオ10世だけがどちらの脚韻とも合わないが、そうすることで、ここではかえって目立っている。これはあたかも、彼の名前を強調させることで、レオ10世が5人の中でも、特に一番の悪者であることを示しているようだ。ムルナー博士に記述されている *Argentinien* は、何を示しているのかは不明だ。また、エムザーは初めはルターに対し友好的であったものの、1519年のライプツィヒ討論会後は敵対関係となった。<sup>46)</sup> この討論会をきっかけとしたために、*Lips(e)n* と修飾したようだ。次にレオ10世には *Antichrist* 「反キリスト」と記述されている。ここで明確に、カトリック教会の教皇はキリストとは真逆の存在であることを主張している。また、聞き手は「我々こそが正しいキリスト教徒であるという、カトリック教会との差別化を図っている。次にエックの名前を見てみる。ライプツィヒ討論会はルターとエックのための討論であり、当時エックはインゴルシュタット大学の教授であった<sup>47)</sup> ことから *Ingelstatensis* と修飾されたと考えることができる。またレンプ

43) レンプの名のもじりについては、森田(1993:164)を参照。

44) Scribner (1981:75)を参照。

45) クレベール(1989:23)を参照。

46) 藤代(2006:138)を参照。

47) 藤代(2006:138)とシュトゥッペリヒ(1984:355-6)を参照。

もテュービンゲン大学教授であり、<sup>48)</sup> このことから *Tubingensis* を使用したと言える。

では次に図の中央部分を見ていく。まず気がつくのは、ここからはどの言語テキストにも2つずつの脚韻が使用されているということだ。左側のテキストはレオ10世からエックに対するテキストであり、それは1行目に使われている *Lieber Eck* 「愛するエックよ」という呼びかけ表現の中にうかがえる。2行目には枢機卿の帽子がメトノミー (*Metonymie*) として使用されており、その帽子はここでは枢機卿の地位を意味している。また、この *Cardinals* 「枢機卿」も3行目にある *Concludieren* 「打ち負かす」もラテン語法 (*Latinismus*) の使用である。<sup>49)</sup> 当時は、学識のある者は皆ラテン語を使用していた。ここでラテン語法を用いることで、レオ10世のことばの中に上流階級であることを示し、崇高さではなくて、むしろ皮肉を表している。なぜなら、ラテン語は当時の民衆にはほとんどなじみがなく、大衆性もない。ここではラテン語を使うような、民衆とは階級が違う人であるから、民衆のことは何にもわかっていない、という意味にとらえられている。つまり、ラテン語法によってレオ10世と、聞き手である民衆の距離をより大きくしようと狙ったのだ。図像分析の中で述べたように、豚は元々汚らしい動物である。4行目において、豚の頭を飾るということで、矛盾さに強調を置き、聞き手の注意を惹きつけている。これはつまり「残忍な」レオ10世によって「汚れた」「貪欲な」エックでさえも枢機卿になることができってしまう、ということを民衆に伝えようとしている。

今度は *Herr Löw* 「レオ様」という呼びかけがあることから、エックからレオ10世に対するテキストであることがわかる。1行目に *all* 「全ての」を使って次に続くものを誇張している。4行目の *Haw* は、*hauen* 「わってみせる」の変化形である。これは非常に乱暴な単語であり、野蛮語法 (*Barbarismus*) に含むことができる。カトリック教会を擁護する、知識ある大学教授という表の顔に対し、彼の内面は非常に野蛮であり教養が低いことを、この *hauen* を使うことで暴きだそうとしていると考えられる。

ここから、図像の中で一番下に位置しているテキストの分析を行っていく。こ

48) 森田 (1993: 162) を参照。

49) ラテン語法については、ラウスベルク (2001: 77) を参照。

れは一番上のテキストと同様に、ルターの敵対者たちが描かれている真下に位置したテキストが、その人物の説明となっている。では左から順に見ていく。最初はムルナーに対するテキストである。3行目に *hyn vnd her vnd widerumb* 「あちらこちら」と記述されており冗語法 (Pleonasmus) と言ってよいだろう。ムルナーはルターを捕まえるために俊敏な猫と同様、必死にことを進めたが、ルターを未だ捕まえられない様子が強調されている。つまり、ルターには責めるべき事柄が見つからず、4行目に書かれているように、彼が常に正しい行いをしていることを、強調する効果を持っている。

次にエムザーを見ていく。1行目の最初に *Ach* 「ああ」という感嘆法 (Ausruf) が使用されている。感嘆法による情動は、うわべだけのものであるから、<sup>50)</sup> 1行目と2行目に対する皮肉への強調と考えられる。山羊は「淫蕩な性質」(クレベール 1989: 79) を持つものとしても知られており、1行目において *Bock* 「オスヤギ」を *junkfraw* 「処女」と修飾する矛盾語法 (Oxymoron) により、さらにエムザーの本来のだらしない生活を聞き手に知らせようとしている。これは2行目にある *keu(n)schait* 「貞節」にも当てはまる。

次のテキストはレオ10世に対するものだ。ここでも1行目に *Antichrist* 「反キリスト」とレオ10世を名付け、聞き手にもう一度レオ10世のキリストとは真逆の位置づけを確認させている。これにより、*Der irdisch Got* 「地上の神」は本来 *Got* という単語が持つキリスト教における最高権威の地位を奪われているだけでなく、レオ10世が *Antichrist* の中の *Got* という、最も軽蔑すべき存在であることを示している。1行目のテキストで聞き手に対するレオ10世への信頼を根絶しようとしている。また3行目には *gewalt vnd geitz falsch Curtisey* 「暴力、吝嗇、誤った佞臣」というようにに列挙されている。これまでレオ10世がいかに多くの、そして誤った行為を「反キリスト」として行ってきたかということを、列挙することで強調している。4行目の最初には、エムザーのテキスト1行目で使用されたように、*Ach* 「ああ」という感嘆法が皮肉的に用いられている。さらに *Christ von himel* 「天におられるキリスト」は1行目の *Der irdisch Got vnt Antichrist* 「地上の神・反キリスト」と対比的に置かれており、聞き手に、天にいるキリストこそが真のキリストであることを強調する効果を持っている。

50) プレット (2000: 147) を参照。

エックに対するテキスト1行目には、*Recht wie ein Saw*「まさに豚のように」と述べられ、直喩 (*Vergleich*) が使用されている。さらに *recht*「まさに」で修飾することでより強調し、その信憑性を高めようとしている。図像分析で豚の性質にもふれたが、テキスト内で明確に豚とエックの食欲さの共通性を、直喩を使って述べることで、聞き手へのよりの確なエックの性格理解を促そうとしている。

最後にレンプに関するテキストを見る。2行目には *Christ*「キリスト者」とあるが、それを修飾しているのが *boser*「悪しき」であり、さらに *Mit neyd vnd zorn*「妬みと怒り狂う」で修飾している。ここでレオ10世のように、*Antichrist* と記さないのは、「キリスト者」を装った悪も存在する、ということを表すためではないかと考えられる。さらに3行目では、エックのときと同じように、*recht wie ein hundert*「まさに犬のように」と直喩を使い、犬の攻撃性や凶暴性と、レンプの性格が関連していることを表している。

## 6. 結 び

以上、2種類の印刷ビラを分析してきたが、図像と言語テキスト双方の随所に、レトリックの手法が存在していることが明らかになった。しかし、どの印刷ビラも、ただ単にレトリックがいくつも集積しているだけではなく、それぞれが有機的に関連し合っている。

1番目に分析をおこなった『ヨハン・フス』の印刷ビラは、カトリック教会に対し、自らの命をかけて批判をしつづけたフスを題材として事実を述べることで、フスの正当性、ひいてはプロテスタントとしての、宗教改革者達の主張の正当性を伝えようとしている。その正当性は、古くからの民間信仰と、科学的権威によって裏付けられることでさらに高まる。また、*Christ* や *Gott* の多用も、非常に効果的と言える。キリスト教が生活の基盤であったとも言える当時の民衆は、キリストの名や神という表現が関連しているだけで、権威をもったものと感じ、ある種、盲目的に信用していたのであろう。そして同じような語彙を反復させることでより聞きやすさを与えた。なぜなら「反復は生のリズムそのもの」(瀬戸 2002: 105)であり、「脈拍、呼吸、一步一步、活動と休息」(同上、同ページ)だからだ。さらに、これとは逆の効果を狙ったものが、*Antichrist* や *Teufel* とカトリック教会を結びつける方法である。このように明確な対比を用いることで、聞き手により

強く印象づけることができる。フスの印刷ビラには、事実を根底にしっかりと据えて、論理的に民衆を説得しようという性格を見てとることができる。

2 つ目の印刷ビラ『ルターの敵対者』では、まず図像に娯楽性を多く含んでいることがわかる。5 人の敵対者に動物の頭をさせることで、笑いを誘う要素とし、また少々グロテスクさも加わえられている。インパクトのあるものは記憶への手助けとなることから、<sup>51)</sup> 人々を楽しませながらこの印刷ビラの印象づけを行っている。また、この動物の頭を「仮面」と捉えることもできる。樋口によれば、「仮面が人格を支配」（樋口 2005 : 20）し、「仮面は人格そのものである」（同上、同ページ）。まさにこれらの動物の仮面は、顔を覆い、仮面の下にある本当の顔を隠すという機能を持っていながら、ルターの敵対者 5 人そのものの姿を表しているのだ。さらに樋口によれば。仮面を使用することで、「隠すことの中に、裏返された誇張法的一端を見る」（同上 : 27）ことができる。つまり、5 人の敵対者に見合った仮面を被せることで、誇張法の働きが生まれ、かえってそれぞれ 5 人の本性を、より際立たせて表現することができる。

さて、言語テキストに目を向けると、揶揄が目立つ。この攻撃的な姿勢や文体は、当時の 16 世紀の社会と関係している。<sup>52)</sup> 当時宗教改革者らは、勢いをつけてきたものの、依然としてプロテスタント（新教徒）はカトリック教会よりも政治的、社会的に下に位置づけられていた。<sup>53)</sup> 不利な立場にあった宗教改革者らは、カトリック教会の権威と秩序をくつがえすために教会の地位を強く打ちのめす必要があった。<sup>54)</sup> そのため、宗教改革者たちはカトリック教会側を感情的に刺激するよう、挑発的に、そして直接的に述べていた。<sup>55)</sup> このような社会的影響が、印刷ビラにも反映され、カトリック教会を大いにあざける印刷ビラが登場した。また、その風刺性は動物メタファーを多く織り交ぜたものでもあり、テキスト内においても、娯楽性が存在すると同時に、皮肉で満ち溢れている。この印刷ビラでは、娯楽的要素で民衆を惹き付け、積極的なカトリック教会への過度の揶揄をもって、民衆に教会の腐敗を知らしめようとしたと言える。

51) オング（1991 : 149-150）を参照。

52) Nitta（2008 : 183）を参照。

53) 同上、同ページを参照。

54) 同上、同ページを参照。

55) 同上、同ページを参照。



このように、分析してきた2つの印刷ビラはそれぞれ「カトリック教会＝敵」と「宗教改革者＝味方」という区別をつけ、プロテスタントである宗教改革者の正当性を主張し、また、カトリック教会の腐敗を批判している。聴衆を納得させるには、「激しい感情をかき立てること」（プレット 2000: 20）が必要だ。つまり宗教改革者達は、まず、少しでも多くの民衆の心を宗教改革へと動かすことを目的に、民衆の心を掻き立てようとした。彼らの図像とテキスト双方におけるレトリックの手法が、印刷ビラの内容を何倍も効果的に民衆に示して見せたのだ。

## 参考文献

- 青山四郎（1984）『ルカス・クラナッハとルター』グロリア出版。
- 新井皓士（1984）「トーマス・ムルナーに関する一考察 『文化史と文学史の狭間』ケンキウ備忘」〔『一橋大学研究年報 人文科学研究』第23巻、S. 6-33〕。
- ブリックレ、ペーター（1991）（田中真造、増本浩子訳）『ドイツの宗教改革』教文館。
- チャルディーニ、ロバート・B.（2007）（社会行動研究会訳）『影響力の武器 - なぜ、人は動かされるのか』誠信書房。
- エリアーデ、ミルチャ主編 ローレンス、サリヴァン・E. 編（2002）（鶴岡賀雄、島田裕巳、奥山倫明訳）『エリアーデ・オカルト事典』法蔵館。
- エンゲルジング、ロルフ（1985）（中川勇治訳）『文盲と読書の社会史』思索社。
- F. A. Brockhaus（2006）: *Brockhaus die Enzyklopädie in 30 Bänden*. Band 20. Leipzig.
- フェーブル、リュシアン／マルタン、アンリ・ジャン（1985）（関根泰子、長谷川輝夫、宮下志郎、月村辰雄訳）『書物の出現 上下巻』筑摩書房。
- フランス、ピーター（1992）（平松良夫訳）『聖書動物事典』教文館。
- 藤代幸一（2006）『ヴィッテンベルクの小夜啼鳥 — ザックス、デューラーと歩く宗教改革』八坂書房。
- 樋口桂子（2005）『メトニミーの近代』三元社。
- Gölitzsch, Johannes（1563）: *Ein erschreckliche Geburt/ vnd augenscheinlich Wunderzeichen des Allmechtigen Gottes/ so sich auff den 4. tag des Christmonats/ dieses 1563. Jars/ in der nacht/ in dem Dorff Werringsleben/ In eines Erbarn hochwei-*

*sen Raths/ der alten löblichen Stadt Erfffurds gebiette/ zugetragen.* Erfurt.

川島淳夫編集主幹 (1994) 『ドイツ言語学辞典』 紀伊国屋書店.

工藤康弘, 藤代幸一 (1992) 『初期新高ドイツ語』 大学書林.

クレベール, ジャン・ポール (1989) (竹内信夫, 柳谷巖, 西村哲一, 瀬戸直彦, アラン・ロシェ訳) 『動物シンボル事典』 大修館書店.

ラウスベルク, ハインリッヒ (2001) (萬澤正美訳) 『文学修辞学 文学作品のレトリック分析』 東京都立大学出版会.

Leonhard, Joachim-Felix / Ludwig, Hans-Werner / Schwarze, Dietrich / Straßner, Erich (Hg) (1999): *Medienwissenschaft: Ein Handbuch zur Entwicklung der Medien und Kommunikationsformen*. 1. Teilband, Berlin.

ミルワード, ピーター (1992) (中山理訳) 『聖書の動物事典』 大修館書店.

モレリ, アンヌ (永田千奈訳) (2002) 『戦争プロパガンダ 10 の法則』 草思社.

森田安一 (1993) 『ルターの首引き猫』 山川出版社.

永田諒一 (2004) 『宗教改革の真実 —カトリックとプロテスタントの社会史』 講談社.

日本基督教協議会文書事業部, キリスト教大事典編集委員会 (1968) 『キリスト教大事典』 教文館.

日本基督教団 (1986) 『キリスト教人名辞典』 日本基督教団出版局.

Nitta, Haruo (2008): Sprachliche Einstellung im soziokulturellen Kontext des Reformationszeitalters –Luther und Murner. In: 『武蔵大学人文学会雑誌』 第 40 巻 2 号, S.156-186.

ノーマン, エドワード (2007) (百瀬文晃監修) 『ローマ・カトリック教会の歴史』 創元社.

オング, ウォルター・J. (1991) (桜井直文, 林正寛, 糟谷啓介訳) 『声の文化と文字の文化』 藤原書店.

小野光代 (2001) 「Wickiana とその作者像をめぐる」〔関西外語大学『研究論集』 第 74 号 S. 51-66〕.

小野光代 (2006) 「16 世紀ドイツの Flugschrift における語・句の重ねについて —言語平衡論との関連において—」〔関西外語大学『研究論集』 第 83 号 S. 143-157〕.

- プレット, ハインリヒ・F. (2000) (永谷益朗訳) 『レトリックとテキスト分析 レトリックの視点からのテキスト分析入門』 同学社.
- ポーレンツ, ペーター・フォン (1974) (岩崎英二郎, 塩谷錠, 金子亨, 吉島茂訳) 『ドイツ語史』 白水社.
- 佐藤卓巳 (1998) 『現代メディア史』 岩波書店.
- シュトゥッペリヒ, ロバート (1984) (森田安一訳) 『ドイツ宗教改革史研究』 ヨルダン社.
- Schwitalla, Johannes (1983): *Deutsche Flugschriften 1460-1525: textsortengeschichtliche Studien*. Tübingen.
- Schwitalla, Johannes (1999): *Flugschrift*. Tübingen.
- Scribner, Robert W. (1981): Flugblatt und Alphabetentum. In: Hans-Joachim Köhler (Hg.): *Flugschriften als Massenmedium der Reformationszeit*. Stuttgart.
- Scribner, Robert W. (1981): *For the Sake of Simple Folk*. Oxford.
- 瀬戸賢一 (2002) 『日本語のレトリック : 文章表現の技法』 岩波書店.
- 須澤通, 井出万秀 (2009) 『ドイツ語史 社会・文化・メディアを背景として』 郁文堂.
- 田辺幹之助, 佐藤直樹 (編) (1995) 『ゴータ市美術館所蔵作品による宗教改革時代のドイツ木版画』 国立西洋美術館.
- 上村くにこ (1990) 『白鳥のシンボリズム: 神話・芸術・エロスからのメッセージ』 御茶の水書房.

(せりざわ・まどか 学習院大学大学院人文科学研究科博士前期課程)

## **Rhetorische Mittel der Überredung in Flugblättern der Reformationszeit**

MADOKA SERIZAWA

Gegenwärtig gibt es viele verschiedene Informationsmedien. Wir können gleich ein Ereignis, welches in einem fernen Land passiert ist, erfahren und können sogar, z.B. durch eine Rundfunkübertragung, ein lebendiges Gefühl davon bekommen. Die besondere Form des Massenmediums, einer Menschenmenge Informationen mitzuteilen, geht schon bis auf die Reformationszeit zurück. In der vorliegenden Arbeit untersuche ich das damals neue Papiermedium und analysiere Flugblätter in Hinsicht auf visuelle Informationen und in Hinsicht auf ihre Sprachformen als effektvolle Mittel der Überredung.

Ohne die Erfindung der Drucktechnik wäre wohl überhaupt keine Reformation passiert. Nach der Erfindung des Typendruckes durch Johannes Gutenberg um 1440 nahm die Produktion von Druckerzeugnissen sprunghaft zu, und auch die zunehmende Papierproduktion war davon beeinflusst. Wegen dieser beiden Hauptursachen konnte das einfache Volk damals Druckerzeugnisse einfacher und billiger erhalten. Das beachteten die Reformatoren, denn sie versuchten bald mittels Flugblätter zu reformieren. Sie verbreiteten ihre Ideen nicht nur durch den Text, sondern auch durch Holzschnitte oder Kupferdrucke – und zwar vor allem als Flugblätter, die sowohl Bild- wie Textelemente umfassen.

In dieser Arbeit analysiere ich auch den damaligen Prozentsatz der des Lesens und Schreibens Kundigen. Da dieser recht gering war, muss in Hinsicht auf die damalige Kultur von einer ‚Stimmenkultur‘ gesprochen werden, die ich in Verbindung mit den Flugblätter setze. Damals gab es nur wenige Schriftkundige: zum Beispiel betrug der Prozentsatz der Schriftkundigen sogar in einer Stadt nur ca. 10 bis 30 Prozent. Kurzum: Für den weitaus größten Teil des Volkes wurde das Leben von der Stimmenkultur bestimmt. Ich vermute, dass dieser historische Hintergrund bei der Struktur der Flugblätter

eine wichtige Rolle spielt, denn in vielen Flugblättern gibt es Hinweise auf das ‚Vorlesen‘. Zum Beispiel haben die Reformatoren auf den Flugblättern häufig Holzschnitte gedruckt, um damit den Analphabeten die Möglichkeit zu geben, den Inhalt der Flugblätter zu verstehen. Außerdem haben sie oft die Texte in Reime gebracht, weil das sehr nützlich beim Vorlesen war und sich die Zuhörer die Reime leicht merken konnten.

Ich habe weiter zu analysieren versucht, welche rhetorischen Mittel sowohl in den Zeichnungen bzw. Bildern und den Texten der Flugblätter benutzt werden. Zuerst bemerkte ich, dass die meisten Zeichnungen fast alle das darstellen, was im Textinhalt auch erwähnt wird. Das ist verständlich, denn die Zeichnung ist für Analphabeten die beste Information. Und wenn man sich die Texte ansieht, dann fällt die Verwendung des Reims ins Auge. In vielen Flugblatttexten werden Reime verwendet, die eine Funktion beim Vorlesen haben und damit Teil der ‚Stimmenkultur‘ sind. Weiter ist auffällig, dass in den Texten, viel mehr als ich erwartet hatte, rhetorische Mittel zu finden sind: Zum Beispiel gibt es Parallelismen, Antithesen, Hyperbeln usw. Häufig wird auch der Name von Christus erwähnt oder treten Bibel-Zitate auf. Damit wollte man sich wohl auf die göttliche Autorität berufen. Aber es gibt nicht nur ernste Flugschriften, sondern andere, die satirische Zeichnungen und spöttische Texte enthalten, die also zur Freude und Belustigung der Zuhörer und Leser dienen.

Als Teil der oben erwähnten ‚Stimmenkultur‘ waren Flugschriften der Reformationszeit sehr populär. Diese Popularität machen die Flugblätter meiner Meinung nach zu einem tatsächlichen Massenmedium. Die Methode der Informationsübermittlung war aber, im Unterschied zu heute, dass sich die Menschen einander die Flugblätter vorlasen. Wenn die Reformatoren im Volk ihre Meinungen zu verbreiten versuchten, war es am wichtigsten, Texte und Bilder der Flugblätter auf rhetorisch wirksame Weise besonders effektiv zu gestalten.